

「間」を聴く設え

しょうのたいこ
庄野 泰子



ま・ここ)に在る音に立ち
会い、その音があるがまま
に受け入れて聴くための作

品——「偶然性の音楽」を作曲したジョン・ケージは、禅の思想に深く影響を受けていた。彼の代表作である『四分三三秒』(一九五二年)では、演奏者は四分三三秒間ステージ上で何も演奏せず、聴衆はその時その場に偶然生じた音と出会う……音との「一期一会」である。この作品は、音楽以外の多くの分野にも影響を与えたが、この曲が三つの部分に分かれていることは、意外に知られていない。しかし実は、この事がとても意義深いのである。各部分の区切り方は、演奏家に委ねられているのだが、初演のデビッド・テュードアはピアノの蓋の開閉によって、それを表した。現在出版されている楽譜では、一枚の縦長の白い紙に、「第一部」

「休み」「第二部」「休み」「第三部」「休み」と上から順に文字が記されている。通常、西洋音楽の楽譜は、時間の進行を横軸に、音の重なりを縦軸にとるようになっており、この作品も初演の楽譜は横方向へ進行するよう書かれていた。後にそれが改訂され、上から下へと縦方向に進行するよう記されてあるのは、単に時間が時計のように流れるだけでなく、そこにある深さを表現しているように思われる。

このように分節化された『四分三三秒』に、日本庭園における「鹿おどし」と共通する思想を汲み取ることはできないだろうか。「鹿おどし」は、もともと鳥や獣を追い払う農耕機具であったが、それを石川丈山が終の棲家とした京都「詩仙堂」の庭に設置したのが、庭園における「鹿おどし」の始まりと言われている。

そして、それが農耕機具から音響装置へと転換した時、その音のポジとネガは反転したのではないだろうか。竹筒が石を打つ音が聴くべき音ではなく、その音と音との「間」こそが、つまり、もともとその場にある樹々のざわめき、風やせせらぎの音こそが、聴かれるための音として浮上する。漫然と過ぎてゆく時間の流れが、「鹿おどし」の音で分節化されることによって、その「間」が生き生きとした音風景として、鮮やかに立ち現れるのである。

そして、この「詩仙堂」が禅寺であることを思い起こす時、『四分三三秒』を分節化したジョン・ケージの思想と、「鹿おどし」を庭に設置した石川丈山の思い——この両者に通底する、「間」を聴く設えというものを、私は感じずにはいられないのである。

- 1 エッセイ 世界へ●世界から
「間」を聴く設え
庄野 泰子
- 2 特集 特別展
自然のこえ 命のかたち
——カナダ先住民の生みだす美
…… 岸上 伸啓
「カナダ文明博物館」の逸品を愛でる機会
…… 岸上 伸啓
イヌイットの眼と心が描きだす版画
…… 小林 正佳
変身の哲学 イヌイットと北西海岸先住民の美術からの問い
…… 大村 敬一
版画に登場する個性的な生き物たち…… 齋藤 玲子
デジタルとアニメの楽しい仕掛け…… 伊藤 敦規
先住民の暮らしを学ぶワークショップ…… 田主 誠

- 8 モノグラフ
点字の宇宙
企画展「…点天展…」の趣旨
廣瀬 浩二郎

- 10 地球ミュージアム紀行
スペインのハムの博物館
ブタを支える地域まるごとミュージアム
野林 厚志

- 11 表紙モノ語り
イヌイットの版画「夏のふくろう」
岸上 伸啓

- 12 **みんぱくインフォメーション**

- 14 人生は決まり文句で
「神の御心のままに」
岡田 千歳

- 15 万国津々浦々
都会の選挙と田舎の選挙
変容するケニアの遊牧民集落
内藤 直樹

- 16 多文化をささえる人びと
外国人の「居場所」をつくる
財団法人 とよなか国際交流協会
野中 モニカ

- 18 生きもの博物誌
世界を動かした熱帯の植物「コショウ」
金子 正徳

- 20 歳時世相編
ホーおじさんの九月二日
ベトナムの国慶節
樫永 真佐夫

- 22 フィールドで考える
ブタ
バブアニューギニアの呪術とモノが宿す力
小坂 恵敬

- 24 **みんぱくウィークエンド・サロン**
研究者と話そう
次号予告・編集後記

東京学芸大学大学院(音楽学)修了。音環境の調査・研究を経て音環境デザイナーとなる。また音と呼吸する光のデザインも手掛ける。福島県いわき市の小名浜港2号埠頭再開発事業・新潟県長岡市の国営越後丘陵公園など。ar + d Award最優秀賞など海外の賞をはじめ、日本建築美術工芸協会AACA賞大賞など受賞多数。『環境デザインの試行』など音環境に関する執筆・翻訳・講演の他、音のワークショップも行う。武蔵野大学環境学部講師。